

森林環境教育のすすめ

1 はじめに

近年、森林での様々な体験活動を通じた野外教育や環境教育、健康づくりや生きがいの場としての利用や森林整備への直接参加など、体験や参加を通じて積極的に森林と関わりながら森林を守り育てていこうとする森林利用への期待が高まっています。そのなかで子供たちや一般の人達を身近な森林へ誘い、その森林の持つ重要性、必要性を再認識してもらおうとする動きが活発になってきました。そこで「森林環境教育」について取り上げます。

2 森林環境教育が生まれた背景

「森林環境教育」という言葉は平成14年度の『林業白書』から良く使われるようになりました。

この中で、森林での多様な体験活動を通じた森林環境教育の機会を子供たちをはじめ広く国民に提供して行くことが、21世紀型森林文化と新たな社会の構造を求めていく上で必要であるとされています。そこでこの言葉が生まれた背景を調べてみました。

① 環境の問題からみた背景

世界的に貴重な森林が急速に減少している現状にあります。森林は動植物の生態系の維持、洪水防止、渇水緩和などの保全機能や二酸化炭素の吸収・固定機能を持ち、温暖化防止に大きな役割を果たしています。この森林の多面的な機能を理解・維持・活用し、循環型社会を構築するための教育として森林環境教育が期待されています。

② 林業の問題からみた背景

間伐などの手遅れ林分が全国各地で顕著にみられ森林が荒廃しているとまで言われています。循環資源としての木材の利用、化石燃料の代替としての森林バイオマス利用等に注目し、林業や森林の新たな方向性である「持続可能な森林経営」の実現を模索する一つの方法として森林環境教育が期待されています。

③ 教育の問題からみた背景

現代社会においては、子供たちの自然体験の不足からストレスによる精神的不安定が原因となる

反社会的行動が頻発している現状です。そこで自然豊かな森林を「環境教育」のフィールドとし、森林・自然の不思議を五感で体験しながら、自然の中で心を癒し、自己の存在確認ができるとともに、里山整備や学校林活動を通じ地域の林業や木材生産とも連携した教育ができる森林環境教育が期待されています。

④ 暮らしの問題からみた背景

都市生活者は日常の暮らしにおいて地域との密着性が低く、自然環境に接する機会が減少してきています。しかし一つの鉢植え植物やちょっとした木製品が生活を和ませ、心にゆとりを与え癒しを感じることができます。となく無機質で味気のない暮らしの中に、植物や木材を効果的に活用しながら生活環境整備と木材有効利用を進められるような森林環境教育が期待されています。

3 環境教育とは

「環境教育とは何ですか。」とよく質問を受けますが、辞書で調べると【環境】人間または生物を取り巻き、それと相互評価を及ぼしあうもの、【教育】教えることとされています。環境教育はいろいろな資料や現場において環境の問題の実態や原因を知ること、そして環境の問題の解決方法を知ることといわれています。この問題を解決するには「規制」「技術開発」「意識改革」の3つの方法があります。ここにあげた3つの方法のうち、どれが最も大切かということでもなく、これらをどのように使い分けるかということが重要で、その内容は次のようになっています。

「規制による解決の方法」は、法律や地域の条例、国家間の条約などによる解決、「技術開発による解決の方法」は、様々な技術の力によって環境問題を解決していこうという方法です。環境問題解決のための技術を「環境技術」と呼ぶほど、様々な技術開発への挑戦が様々な場面で行われています。「意識改革による解決の方法」は、価値観の課題ともいえます。何を手にしたときに幸せだと感じるかという幸せの価値の基準が、【より大きく、よりたくさん、より速く】という基準か

ら、【小さく、少なく、ゆっくりが幸せ】という、新しい価値観も生まれつつあります。こうした価値の軸の移動のようなものも、私たちの意識改革の一つとなっています。この意識改革をすすめる教育的な行為が「環境教育」と呼ばれています。

4 教育とは潜在しているものを引き出すこと

教育 (EDUCATION) の語源である EDUCE の意味は、「教え込む」ではなく「引き出す」と言われます。環境教育は「もの知りを育てる教育」ではなく「行動する主体的個人を育てる教育」を主眼としていることから、この「引き出す教育」という考え方は非常に重要となります。

体験学習の意義は、例えば、間伐という体験をしたら、間伐をしたのと同じくらいの時間を使って、活動をふり返ること、噛み砕いて理解すること、この時間が大切となります。「聞いたことは忘れる。見たことは思い出す。体験したことは理解する。そして、発見したことは身につく (To find is to use)」といわれます。ただ「体験をするだけ」の「体験“だけ”学習」ではなく、体験したことを振り返り、そこから学べることを一般化するプロセスを重視する、本来の意味の「体験学習」が大切になってきます。

5 森林環境教育プログラムの実施

この教育を行おうとする時は次の三要素が必要といわれています。

① フィールドとしての森林

体験を主体とした教育をするには良質のフィールドが必要です。天然林、人工林、都市近郊林、身近な里山などどれをとっても多様な要素を持っており、その森林の森林生態系からその周辺の自然環境も併せて様々な学習の場となります。ただし、危険箇所 (崩落地や倒木、蜂の巣、有毒蛇等) の多くある森林は避けるべきでしょう。

② 教育プログラム

プログラムは、参加者が体験を通して「気づき、理解し、行動する」ためのねらいを持った活動であり、そのねらいにそってアクティビティ (ある目的のための活動・行動) を時間内にならべたものをいいます。たとえば林業体験と自然観察会を併せて一日のプログラムにしたものや、一年を

通して林業体験を学んでいこうとするものなどがあります。基本的には、プログラムデザイン (オリエンテーション、アクティビティ、小講義、ふりかえり等) で構成されます。これは構成を考えたいわゆる進行表のことで、単なる時間割とは違って起承転結のあるものをいいます。

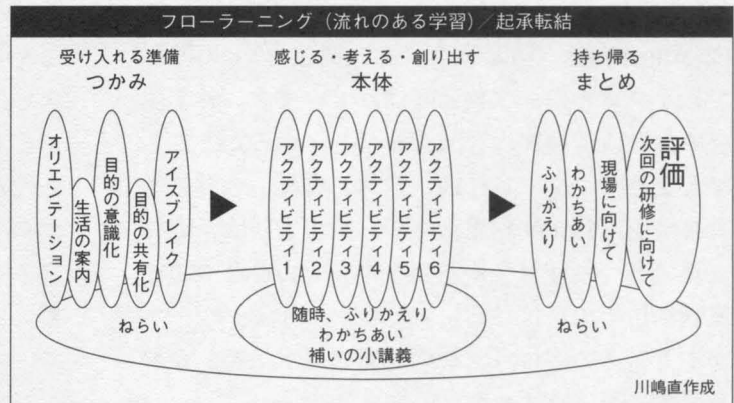


図 森林環境教育プログラムデザイン (宿泊型指導者養成の場合)

③ 指導者

指導者は、森林の多様性、総合性や人間生活との関わりについての知識や理解、森林との関わり方を習得しているだけでなく、指導・伝達する対象 = 「人」とのコミュニケーション力も必要となります。つまりこれをインタープリテーション能力といい、参加者自らが楽しみながら体験を通じ森林の持つ多様な価値に気づくような体験の機会を企画できる能力が必要といえましょう。

6 おわりに

このように森林と人との豊かな関係を築き、環境との調和や資源の循環型社会を構築する観点から森林環境教育を推進していくことが重要となっています。当センターにおきましても森林環境教育の普及に努めるとともに、次代を担う子供達に対し、森林で遊び、森林と親しみ、森林と自然を体験することにより“命を大切にする心”“ものを大切にする心”を EDUCATION (教え、導き、引き出す) できるよう心がけ、森林環境教育を進めています。

(指導部 清水篤)

《参考文献》

- 1 森林環境教育プログラム事例集
(全国森林組合連合会)
- 2 森林環境教育ホームページ
<http://www.zenmori.org/feenet/index.shtml>